

## 阿彌陀佛號について

——我が國淨土敎史研究の一視點——

伊 藤 唯 眞

### 一

わが國民間僧尼の系譜は、大體において、奈良時代の禪師又は菩薩號をもつたもの、平安時代の上人或は聖號をもつたもの、鎌倉時代の阿彌陀佛號をもつたもの上に、その前半を迎えることができるようである。勿論それらは、平安時代の聖が鎌倉時代には消滅して、かわつて阿彌陀佛號をもつた民間僧が出現するといったような交替的關連をもつものではなくて、おのおの民間僧の一つのタイプとしてその脈絡を長く後世に残すものではあるが、なおこの「菩薩」僧、「聖」僧、「阿彌陀佛」僧がそれぞれ各時期の民間僧尼を代表するものとして特異な存在であつたことは否めないであろう。「菩薩」僧から「聖」僧へ、「聖」僧から「阿彌陀佛」僧へという展開は、單なる名稱の推移ではなく、民間僧尼の歴史が繰り擴げる新局面であり、ひいては彼等が構成する民間佛敎の形成過程そのものを表徴している、というべく、社會基層に展開する民間佛敎が、これら「菩薩」僧、「聖」僧、「阿彌陀佛」僧に負うところは非常に大なるものである。

ところで、これら民間僧尼についての研究は、從來あまりなされておらず、最近になつてようやく二、三の學者に

よつてその體系的研究の緒が與えられたばかりという狀態である。<sup>③</sup> 従つてその研究の歴史はきわめて新しいと言えよう。想うにこのような問題は當然佛教史家が早くより取扱つていなければならぬ性質のものであるが、過去の佛教史が教學史的・宗門史的研究に重點を置いていたため、宗派間の間隙にあつたこれら民間僧には多くの關心を拂わず、所謂佛教史家以外の民俗學、宗教學、或いは日本史學の側の學者から注目されるに至つて始めて、この問題を見直すようになった、というのが實情である、この等閑視されてきた民間佛教の研究が今後佛教史の重要な課題の一つとなることは疑いのないところである。

わたくしは、如上の觀點で、民衆佛教史の一骨格をなす民間僧尼の系譜をこゝしばらく考察している。而して「菩薩」僧については本誌で、また「聖」僧については他誌で、それぞれ卑見の一部を述べたので、本稿においては未だ多く觸れることのなかつた阿彌陀佛號を冠稱せる一群のひとびとについて考えてみようと思う。阿彌陀佛號を冠稱するものは、後述の如く、出家者のみに限られないので、本稿においても考察の範圍は當然、僧としての阿彌陀佛號所有者のみに止まらず、従つて民間僧尼の系譜という觀點からは少し離れることになるかもしれないが、とも角如上の關心をこの考察の出發點として、阿彌陀佛號所有者を眺めてみたい考えである。

註① 拙稿「我が國初期淨土教の形成史的研究——「聖」僧・「阿彌陀佛」僧を中心として——」（東山高校研究紀要第四集）。

② 但し「菩薩」僧については、かかる名稱のままでその脈絡を後世に持つ民間僧は見出せないが、「菩薩」僧のもつていた内容的性格は民間の「聖」僧や一部の教團内部の僧侶に繼承されている。

③ 例えば堀一郎博士著『我が國民間信仰史の研究』、井上光貞氏著『日本淨土教成立史の研究』（第三章第三節）など。

④ 拙稿「奈良時代に於ける菩薩僧について」（佛教大學研究紀要三三號）。

⑤ 拙稿「ひじり致し特に上代末期の聖の宗教史的一考察——」（同志社大學院研究年報一號）同「聖僧についての一考察——藤原時代の公卿と聖と——」（佛教論叢第四號）、註①のものなど。

⑥ 僧職者以外の阿彌陀佛號所有者についてのまとまつた研究としては、水上一久氏稿「阿彌陀佛號の一考察」（國學院雜誌五七一四、同五八一二）があるのみである。

## 二一

「阿彌陀佛」號、略して「阿彌」號であるが、これは學問的にどのように解されているであろうか。織田得能氏は『佛教大辭典』において「阿彌とは阿彌陀佛の略語であつて、阿彌陀佛を念ずる人、みづから、この名を附するが爲に又阿彌陀佛號をいふ」と説明している。また望月信亨博士の『佛教辭典』は「淨土宗及び時宗僧侶の法諱の上に加贈する稱號、具に阿彌陀佛號又は阿彌陀佛名と云ふ。文治二年秋、東大寺大勸進俊乘房重源、大原談義の筵に列して法然の説法を聴き、信心肝に銘ぜし餘り、一の志願を起し我邦の道俗にして死後閻魔王宮に到し、名字を問はれん時、佛號を唱へしめん爲に阿彌陀佛名をつくべしとて、自ら南無阿彌陀佛と號せしを起源とす（中略）爾來、淨土宗及び時宗等にて之を阿號と稱し、宗脈相承の璽書を領する者は、之を法名中に加ふるを例とするに至れり」と述べている。いずれもひろく行われている一般の見解である。阿彌陀佛號は時宗の専用物かの觀がある程であるが、しかれば時宗教團史研究家はこれといかなるものとみているであろうか。さきに吉川清氏によつて時宗史に關する最も新しく且つ最も體系的な研究が發表されたが、それによると「阿彌號は淨土願生者のうちの特定の彌陀信奉者の表徴であり、鎌倉時代以後の宗教界の一部法名であつたのではないかと考えられる」<sup>①</sup>という。また、阿彌陀佛號は重源に始り、鎌倉時代初頭から現われ、室町時代に激増し、この極盛期においてついに阿彌號となり阿號となつた、と説明し、さらに阿號は確かに阿彌號の簡略化されたものであるが、密教徒の間でも古來から阿字觀に基く阿號が使用されているので「阿彌陀佛號を簡略したものが阿號であるとの命題は成立するかもしれないが、阿號すなわち阿彌陀佛號

の略化であるとの逆説は成立せず、それとともに、密教の阿號と淨土教の阿號とはおのずから別個の成立の由來を有するものであるということを憶念すべきである」と注意している。<sup>③</sup>これが最近の代表的見解である。密教の阿號と阿彌陀佛號の略化された阿號とを區別しなければならぬことは吉川氏の指摘の通りであるが、阿彌陀佛號の創始に關する點と阿彌陀佛號所有者の性格規定に就いてはなお一考の餘地があるようである。同氏は阿彌號は重源に始めりとし、「阿彌號を發案した重源」（傍點筆者）とも言つておられるが、果してそうであらうか。また「阿彌號は淨土願生者中の特定の彌陀信奉者の表徴である」（傍點同前）というが、その特定の內容こそ明かされねばならないものである。同氏はその特定のということの內容については觸れておられず、單に諸行願生者中の彌陀口稱一行の願生者であるという意味で「特定の」という言葉を使われているようでもあるが、われわれは、阿彌號を考へる場合こういつた段階にとゞまらずして、さらに、それは彌陀口稱專行の淨土願生中のある「特定のもの」ではなからうか、というように考へていくべきであらうと思われる。以上の二點は確かに阿彌陀佛號考察上の重要課題である。

そこで先ず阿彌陀佛號の創始に關する問題であるが、阿彌陀佛號が重源に始るといふ見解は『愚管抄』や幾多の法然傳に據つているのである。吉川氏も『黒谷上人傳』『法然上人傳記』『愚管抄』の記述を引用している。<sup>④</sup>さきに掲げた望月佛教辭典の解説も亦こういつた類のものを典據としているのである。幾多の法然傳は重源に阿號が始まるということとで一致しているが、なお多少の違いもある。例えば各種法然傳の原型となつたと考えられる『源空聖人私日記』では、大原談義を主催した顯眞の、法華經の經文の文學をとつて阿彌陀佛名を各人につけるといふ發案で、重源もこの時から南無阿彌陀佛と名付けた、と記しているし、<sup>⑤</sup>また『源空聖人私日記』の影響下に成立した『傳法繪』は、大原談義のところでのべないで大佛勸進拜命に關聯して阿彌陀佛號のことをのせている。<sup>⑦</sup>ともあれ多くの法然傳が記する所に從う限り、阿彌陀佛號の付稱は重源によつて大原談義以降になされたと解されるのである。しかし重源の『南

無阿彌陀佛作善集』の「阿彌陀佛名付日本國貴賤上下事建仁二年始之」(始之の二字は後補<sup>⑨</sup>)なる文に従えば、田村圓澄氏も言われる如く、これを大原談義の時と關係づけて説くのは附會の説にすぎなくなる。従つて最近の學界の見解

通り重源の阿彌陀佛號付稱は建仁二年をさかのぼること二十年の壽永二年(一一八三)に始るとするのが妥當である。このように重源が阿彌陀佛名を貴賤上下に付したことは壽永二年以降のことで、これは矢張り大佛再建の勸進と關係があるのである。<sup>⑩</sup>ところでこゝで注意すべきは、彼が創始したのは、阿彌陀佛號の貴賤上下、即ち俗人への付與であつて、阿彌陀佛號そのものの發案ではないことである。前にものべた如く『源空聖人私日記』は顯眞の發議によるとしている程であつて、では顯眞の發案かと云えばこれも確かではなく、法華經の經文の一字をとつて阿彌號に冠するといふ天台らしい趣もあるが、これは重源の阿彌陀佛號付與の盛行の契機を大原談義にもつていき、その主權者たる顯眞に發想を付託したものと思われる。また『愚管抄』には「大方東大寺の俊乗房は阿彌陀ノ化身トイフコト出デキテ云々」<sup>⑪</sup>とあつて重源に起源するような言辭があるが、これは阿彌陀の化身であるといふ阿號を使用するについての一つの見解が出されていたことを意味し、阿彌號そのものを彼が創出したというのではない。いづれにしても阿彌陀佛號を重源が發案したかの如く述べるのは誤りである。なんとすれば阿彌陀佛號が重源の發案であるならば、右にのべた如く壽永二年以降においてはじめてその使用例が求められ、それ以前にはあつては見出せないこととならねばならない。ところが事實は重源の阿彌陀佛號付稱以前にも阿彌陀佛號の使用例が見出されるのである。例えば

- (イ) 法成寺萬燈會に參集した前阿彌陀佛たち(治安三年一〇二三)<sup>⑫</sup>
- (ロ) 正倉院藍表紙大般若經百五十の執筆沙彌黑阿彌陀佛(寛治元年一〇八七)<sup>⑬</sup>
- (ハ) 東大寺戒壇院に田地を寄進した法阿彌(承徳元年一〇九七)<sup>⑭</sup>
- (ニ) 大佛殿燈油田として水田を寄進した大和の尼我阿彌陀佛(保延三年一一三七)<sup>⑮</sup>

(㊦) 瑜伽論抄を書寫した南無阿彌陀佛（承安二年一一七二）<sup>㊦</sup>

などが擧げられる。このように阿彌陀佛號の萌芽は案外早いのである。しかし斯號が流行するのは矢張り重源の阿彌陀佛號付與運動以降である。水上一久氏はその例として重源の同行同朋である安阿彌陀佛（快慶）、備前國野田庄預所の重阿彌陀佛、同國南北條等三カ庄預所の得阿彌陀佛、春阿彌陀佛東、大寺三月堂棟札の信阿彌陀佛外、周防阿彌陀佛寺領田の春阿彌陀佛外などや東大寺、高野山、東寺等の土地關係の文書から覺阿彌陀佛以下の多數の阿彌陀佛所有者を擧げておられるが、私もまたこの外に寫經關係から摘出したものをも含めて、長樂寺大般若經を書寫した阿彌陀佛願（壽永二年一一八三）<sup>㊧</sup>、無量壽經、梵字經を書寫した昭阿彌陀佛（正治元年一一九九、同二年一二〇〇）<sup>㊨</sup>、大佛殿華嚴經を書寫した賢アミダ佛（正治二年一二〇〇）<sup>㊩</sup>、高野大師御筆妙音菩薩品を金剛寺に寄進した阿彌陀佛（建仁元年一二〇一）<sup>㊪</sup>、大湯屋湯田として東大寺に田地を寄進した禮阿彌陀佛（元久元年一二〇四）<sup>㊫</sup>、僧尊證に田地を賣つた比丘尼觀阿彌陀佛（建保六年一二一八）<sup>㊬</sup>、大般若經を書寫した成阿彌陀佛（安貞二年一二二八）<sup>㊭</sup>、土地一處を丹後殿に相博した順阿彌陀佛<sup>㊮</sup>、その所有せる山地を處分した比丘尼觀阿彌陀佛（寛元三年一二四五）<sup>㊯</sup>、辨慶より水田を買つた聖阿彌陀佛（文永五年一二六八）<sup>㊰</sup>などを列擧することができる。この中には重源と關係のあつたものや、また關係なしに阿彌陀佛號を恣意的に冠稱していたものもあるであろう。これらは偶目の一斑であつて、もし精査するならばその數は相當なものとなるであろう。水上氏の檢出された分も併せ考うなら、重源の例の壽永二年（一一八三）以降は廣範圍に阿彌陀佛が使用されているのを十分に窺うことが出来る。源空の教團にも阿彌陀佛號冠稱者が相當數參加していたらしく、七カ條起請文の署名中阿彌陀佛及び阿號を冠稱する者十八名を數えあげることができる<sup>㊱</sup>。水上一久氏は、阿彌陀佛が史料的に多く現われるのは建久、正治、建仁の間であつて、この段階では重源直接の盟友結社の範圍に止つており、それ以降の段階において廣く一般的に現われるようになるが、作善集の建仁二年は全國的規模への擴大の開始とみら

れる、と述べられているが、このことは前述の検討に徴して十分に認められるところである。

さて、阿彌陀佛號の發生、重源の阿彌陀佛號創始の意味が右の如くであるとするなら、吉川清氏がその著『時衆阿彌教團の研究』において「治承四年平重衡の兵火によつて炎上した奈良東大寺大佛殿の再建勸進の重任を果した俊乘房重源は、法號を南無阿彌陀佛と改め稱したが（中略）千葉頼胤は法阿彌陀佛というように生前から阿彌陀佛號を法號とする人が現れ始めたのは鎌倉時代の初頭からである。」<sup>⑤</sup>「阿彌號が重源に起因したとする部分に關しては信じてよいようだ。」<sup>⑥</sup>などと述べられている所には説明を改補すべき部分があるように考えられる。

以上の考察からこゝで次のことが言い得られるであらう。阿彌陀佛號の使用は比較的古く、今までに目に觸れた史料からするなら、十一世紀初頭にまで溯ることができるとは。しかしこの頃の阿彌陀佛號の使用者はあくまで出家入道者、法師であつて、いわば聖職者が殆んどであるが、重源が大佛殿再建勸進を契機として、この阿彌陀佛號を一般の在俗者にも付與することを創めてより、阿彌陀佛號はひろく僧俗の間に使用されるようになった。而して斯號をわが名にするものが十二、十三世紀の交から急増する。われわれは、聖號を在俗者に付與することを勸進の一方途として始めて案出した重源を以て、聖號冠稱そのものの發案者であるかの如く見る考えや、またそのように思わしめるような説明の仕方から離れねばならない。

註① 吉川清氏著『時衆阿彌教團の研究』（昭和三十一年刊）一一頁。

② 同右書一二頁。

③ 同右書三五九頁。

④ 同右書一三頁。

⑤ 田村圓澄氏著『法然上人傳の研究』第三章。

⑥ 『源空聖人私日記』（前略）結願之朝顯眞付『法華經之文字員數』一人別阿彌陀佛名付被『教訓』大佛上人自『其時』南無阿彌

陀佛之名付給了」(井川定慶氏編『法然上人傳全集』七七頁)。

⑦ 『傳法繪』(井川氏編同右書四七八頁)。

⑧ 帝國美術院附屬美術研究所編輯『美術研究』第三十號(昭和九年六月發行)。

⑨ 田村圓澄氏著前掲書一一八頁。

⑩ 同右、一一〇頁、一一八頁。

⑪ 『愚管抄』卷六。

⑫ 『榮華物語』「御裳著」。

⑬ 田中塊堂氏著『日本寫經綜覽』五四五頁。

⑭ 『東大寺文書』卷十三。

⑮ エール大學所藏東大寺文書(『平安遺文』卷五、二〇〇八頁)。

⑯ 田中塊堂氏著前掲書附錄寫經年表、もしこの南無阿彌陀佛が重源であるとするなら、重源自身の阿彌陀佛號冠稱は壽永以前に遡ることになる。

⑰ 水上一久氏稿「阿彌陀佛號についての一考察」(國學院雜誌五七—四、七一、八一—八八頁)。

⑱ ⑲ ⑳ 註⑯に同じ。

㉑ 『金剛寺文書』(大日本古文書家わけ第七、六九頁)。

㉒ 『東大寺文書』(内閣文庫所藏文書、大和古文書之部二〇頁)。

㉓ 同右、二七頁。

㉔ 註⑯に同じ。

㉕ 『東大寺文書』(内閣文庫所藏文書、大和古文書之部一一二頁)。

㉖ 『高野山文書』四、六六七頁。

㉗ 『東大寺文書』五、一二四頁。

㉘ 「七ヶ條起請文」(原本二尊院藏)生阿彌陀佛、證阿彌陀佛、好阿彌陀佛、慶阿彌陀佛、自阿彌陀佛、觀阿彌陀佛、淨阿彌陀佛、定阿彌陀佛、觀阿彌陀佛、德阿彌陀佛、白阿彌陀佛、持阿彌陀佛、空阿彌陀佛、法阿彌陀佛、唯阿彌陀佛、大阿、惟

阿彌陀佛號について



阿、西阿。

② 水上氏前掲論文七一頁。

③ 吉川氏著前掲書五頁。

④ 同右一四頁。

三

次に阿彌陀佛號所有者の性格をみななければならないが、前述の如くこの聖號冠稱者には僧と俗とがあるから、先きに僧としての阿彌陀佛號所有者即ち「阿彌陀佛」僧の方から考えてみることにする。

前項において挙げた重源時代以前にみられる阿彌陀佛號所有者の例(4)は次の如く記載されている。  
「法成寺萬燈會」四町が内に火點さぬ所無し、萬燈會にはあらで億千萬燈とぞ見えたる。此中に入り満ちたる徒歩人數知らず多かり。世の中の聖僧ども然ながら参りたり。賀茂の祭の一條の大路にだに出で來てのゝしる前阿彌陀佛と云ふ法師ばら聲を捧げてのゝしる阿彌陀の聲さへぞ尊かりける」<sup>①</sup>(傍點筆者)

こゝでわかる事は前阿彌陀佛という法師ばらが聖僧<sup>ひじり</sup>に屬し、阿彌陀佛尊號を高聲稱名する輩であることである。阿彌陀佛名を高聲稱名する法師はまた阿彌陀の聖と呼ばれている。阿彌陀聖と云えば先ず思い出されるのは市聖空也のことであるが、空也を除いたにしても、われわれはなお彼の系統に屬してその芳躰を慕う諸國廻遊の阿彌陀の聖が存在することに想到する。

「今昔、□□ノ國□□郡□□寺……ニ阿彌陀ノ聖ト云フコトヲシテ行ク法師有ケリ、鹿ノ角ヲ付タル杖ヲ尻ニハ杖ニシタルヲ突テ金鼓ヲ扣テ萬ノ所ニ阿彌陀ヲ勸メ行ケル」<sup>②</sup>

「世ニ阿彌陀ノ聖ト云フ者有ケリ、日夜ニ日夜ニ行キ世ノ人ニ念佛ヲ勸ムル者ナリ」<sup>③</sup>

などと『今昔物語集』には出ている。これら阿彌陀聖は阿彌陀佛號を高聲稱名して勸進したものと思われる。『今昔物語集』には「門々戸々ニ行テ自ラ錫杖ヲ振テ地藏ノ名ヲ唱ヘテ人ニ令聞ム」「地藏聖」のことも書かれていて、稱名の尊號がなんであろうと、とも角人に聞かしむに値する高聲の稱名による遊行勸進がいわゆる「……ノ聖ト云フコト」であると察知されるので、「阿彌陀ノ聖」もさだめし阿彌陀佛號を高聲稱名したものと考えられる。先きに掲げた前阿彌陀佛たちは、傍點を施した如く、阿彌陀佛號を聲高々と稱えているし、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と口稱遙かに聲打上げた」る「阿彌陀の聖」のことも同じように『榮華物語』に出ている。このような阿彌陀聖は、法義を教説するというより、この口稱によつてひとびとをひきつけ、かくて勸進の實を擧げていたのであるから、彼等が美聲の持主であつたろうことは十分に察知できる。「天慶以往、道場聚落、修念佛三昧者希有」にして「少人愚女多忌之」むでいたのが、「擧世念佛爲事」すようになつた一因として、彼等阿彌陀の聖が多く能聲の輩であつて、その金鼓や法螺を用いての美聲なる稱名が少人、女性をして感覺的に宗教的陶醉境に容易に入らしめたであらうことがあげられよう。阿彌陀佛號を稱名する阿彌陀の聖としての彼等が、やがては、自稱にしろ又他稱にせよとも角阿彌陀佛號を自己の名にしていつたであらうことは、そう不自然ではないと思う。『源空聖人私日記』において顯眞が法華經經文より一字を撰んで阿彌陀佛號の上に付することを發起したとあるあのことは、阿彌陀佛號の上の一字がどのように撰ばれるのかを暗示しているようである。聖經類よりその一字をとり、想像をたくましゅうするなら、一連の聖經の文句から順次にこれをとつて一種の同行衆的團體が出来ていたかとも考えられるのであるが、これは單なる想像の域を出ない。しかし法華經文の一字をとつてつけることは十分有り得ることであらう。降つて時宗の過去帳に載る阿彌號には氏名の一字をとつて法名としてしているものも多いようであるから、それ以前においても亦氏名の一字を冠して阿彌號を稱するものもあつたであらう。

ともあれ以上によつて、前阿彌陀佛などの阿彌陀佛號所有者は、阿彌陀の聖の系統に屬するものであることが跡付  
けられた。後世行基が阿彌陀佛號を稱えて諸國を遊行したと考えられているのも、阿彌陀佛號口稱の阿彌陀佛僧が、  
民間の遊行宗教者に屬することを暗に示していると解されるし、時代は降るが埼玉縣阿彌家所有文書の「諸國一流沙  
彌由來之事」にある「法名何阿彌別名聖」という文句<sup>③</sup>もまた阿彌號所有者が聖の系譜中に位置することを、傳えてき  
ているものと思われるのである。次にまた阿彌陀聖と世人から呼ばれるものの中には阿彌陀佛號を冠稱して自己の名  
前となしていたものが多くあつたであろうことも察せられた。既述の如く阿彌陀佛號の所有者が文獻上にその名を留  
めてくるのは十一世紀初頭からであるが、この十一世紀初頭はまさしく淨土教が民間においてひろまらんとするとき  
で、阿彌陀聖が空也のあとを受けて活躍している時に當る。さらにまたこの種の阿彌陀佛僧が、呪術者の民間僧とし  
て死者追送の機能を持し、その口稱の念佛も鎮魂呪術的な性格をもつたものとして庶民層から受け取られたことも  
認められるようである。「曠野古原□有<sub>二</sub>委骸<sub>一</sub>推<sub>二</sub>之一處<sub>一</sub>、灌<sub>レ</sub>油而燒、留<sub>二</sub>阿彌陀佛名<sub>一</sub>」<sup>④</sup>めた空也から、「死る事をか  
なしみて、そのかうべのみゆるごとひにひたひに阿字をかきて縁を結ばしむるわざをなんせられける」<sup>⑤</sup>降曉法印、「ど  
しうちしたりとて後日に頸めさるゝ殿原、これの御房達まへはまに出で念佛者には皆念佛すゝめて往生させ、いくさ  
の以後はこれらを皆見知して、人々念佛の信心彌々興行忝なく候<sup>⑥</sup>」という他阿彌陀佛に至る間の歴史には、民間の阿  
彌陀聖の活躍が充ちていたに違いないのである。ある意味では阿彌陀佛僧は時宗の聖たちに直結しているのである。  
ともあれ上の如く阿彌陀佛號を名のる遊行僧は阿彌陀聖の系統に屬し、我が國古來からの幅ひろい傳統を持つている  
遊行的宗教者の中に位置づけられるものである。

翻つて考うに、淨土教は情緒的感覺的に受容され易い側面を多分に持ち、特に貴族階級においてはそうであつたが、  
このことは庶民層においても同様であつた。されば古代末期以降のひとびとにあつては貴賤上下を問わず、念佛者の

玲瓏なる稱名に信仰生活に入る機縁を與えられたり、入信者もまた信行策勵のため能聲の念佛者を不斷に求めたのである。いま阿彌陀佛號冠稱者にしてかくの如き方面で活躍しているものを挙げよう。

參議民部卿平經高（一一八〇—一二五五）は晩年熱心なる念佛者となり、阿彌陀講、迎講、臨終講、別時念佛會などを定期的に催したが、それらの講にはいつも一定の念佛者が招請された。敬佛、聞信、助信、定心、性阿彌陀佛、觀阿彌陀佛などである。特に臨終講が開催されるようになる仁治三年（一二四二）前後からは右にあげた念佛衆と同朋關係を結んでいる程である。彼の日記に臨終講のことが最初に出てくるのは、六十三歳の仁治三年のときで

「今日（三月五日）行恒例臨終講、今月來敬佛、聞信、性阿等也、性阿讀式、其後羞僧前、又與小捧物、仕佛上人爲聽聞來臨」<sup>⑨</sup>

とある。この日記から既に臨終講が毎月開催され、念佛衆も月番制になつていたことが窺われる。事實この月以降毎月念佛衆のことが出ているし、今月衆の都合の悪いときは來月衆を請加して臨終講を營んでいる<sup>⑩</sup>。性阿が性阿彌陀佛であることは「講衆敬佛、性阿彌陀佛、助信等來」とあることや以下に掲げる例によつて明らかである。因みに三月五日の日記には皮聖行圓によつて建立され聖の一據點となつていた有名な行願寺が焼亡したことが書かれている。ところでこの念佛衆は十二人位であつたらしく仁治三年五月五日の條に

「念佛衆故見佛入滅後當百ヶ日也、仍彼衆十二人企一夜念佛可訪件菩提云々、件僧衆之食、予請之、同爲訪其沒後也、兼又摺寫淨土三部經、今日以仕拂上人啓言白之、彼上人又爲清淨結緣云々、未終許上人來、其後彼衆定心、敬佛、性阿彌陀佛、已下少々來、着堂場、予聊儲噓嘍物<sup>⑪</sup>風流自草漏涌文、上人啓白、影向之衆親疎多來、上下反袖、乘燭之間說法了、始念佛、此後結番各勤之、終夜聽聞」<sup>⑫</sup>（傍點筆者）

とあり、翌日の日記にも

「念佛辰刻結願」十二人皆六人分散了食已臨終講衆六人相留行今日臨終講依爲齋日留六人行之、定心讀式書

(中略) 未刻許其衆分散<sup>⑨</sup> (傍點同前)

と見えている。經高は同じく阿彌陀講、地藏講、涅槃講などを奉修しているが、その際は必ず行願阿闍梨、濟圓阿闍梨、經圓法眼、祐眞法眼の如き有階の天台僧を招請している。これに對して右の如き念佛衆が參加する諸講會は、例外なく四十八時念佛會、百カ日念佛會、それに臨終講、順次往生講の如くあくまで念佛宗的なものであつた。<sup>⑩</sup> 經高は仁治三年九月二十五日から四十八時念佛を始め二十九日に結願を迎えたが、その時彼の感激は最高潮に達した。九月二十五日の日記を見ると次の如く書かれている。

「自<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>能聲輩、定心、敬佛、成願、聞信、性阿彌陀佛、准成<sub>已上衆</sub>、此外、觀阿彌陀佛、定佛<sub>已上</sub>、都合八人來臨念佛<sub>兼賜定心</sub>自<sub>二</sub>未刻<sub>一</sub>始也(中略)定<sub>二</sub>四番々衆<sub>一</sub>了<sub>一時二</sub>、聽聞之輩自<sub>レ</sub>京親疎多來、長途不便之念佛聽聞之儀、人以<sub>二</sub>其志甚深<sub>一</sub>、近來之風如<sub>レ</sub>此也」(傍點同前)

而して結願日の二十九日には

「念佛今日可<sub>二</sub>結願<sub>一</sub>、聽聞之輩彌以來増、已如<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>(中略)今朝先行<sub>二</sub>禮讚<sub>一</sub>中日未刻可<sub>二</sub>結願<sub>一</sub>(中略)念佛了改<sub>二</sub>

堂莊嚴<sub>二</sub>其儀如<sub>二</sub>去年<sub>一</sub>(中略)仕佛上人率<sub>二</sub>弟子等<sub>一</sub>沙汰<sub>二</sub>汝<sub>一</sub>迎講事等<sub>二</sub>(中略)刻限已至<sub>二</sub>(中略)念佛衆八人着<sub>二</sub>堂南面簀子座<sub>一</sub>、仕佛上人<sub>今日導</sub>着<sub>二</sub>東階北腋簀子座<sub>一</sub>、先西方菩薩出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>鎮守社鳥居<sub>一</sub>、渡<sub>二</sub>池上黒木橋<sub>一</sub>到<sub>二</sub>中嶋<sub>一</sub>之後漸步行、到<sub>二</sub>小橋<sub>一</sub>間、今三方<sub>二</sub>次第漸出<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>去年<sub>一</sub>、此儀念佛衆等行也、西方<sub>二</sub>已過<sub>一</sub>潺後小反<sub>二</sub>指昇立<sub>一</sub>堂東階之間、南方

步漸出<sub>二</sub>南山<sub>一</sub>渡<sub>二</sub>池上<sub>一</sub>南板橋、西方<sub>二</sub>第一持<sub>一</sub>砂金裏紅薄様、付<sub>二</sub>入<sub>一</sub>堂中<sub>一</sub>置<sub>二</sub>北机南妻<sub>一</sub>一拜、退立<sub>二</sub>正面北方<sub>一</sub>、(中略)

第二<sub>二</sub>持<sub>一</sub>風流衣職<sub>二</sub>以<sub>二</sub>染絹<sub>一</sub>造<sub>二</sub>盛<sub>一</sub>色々時花<sub>一</sub>又昇<sub>二</sub>堂中<sub>一</sub>并置<sub>二</sub>沙金<sub>一</sub>、此間三方<sub>二</sub>皆宛滿<sub>一</sub>庭上<sub>二</sub>東方者出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>梁婆屋<sub>一</sub>自<sub>二</sub>堂前<sub>一</sub>庭石

東妻<sub>二</sub>草花之中進出<sub>一</sub>、東方<sub>二</sub>渡<sub>一</sub>反橋之後、同在<sub>二</sub>件橋良方<sub>一</sub>、南北東皆以<sub>二</sub>分<sub>一</sub>立<sub>二</sub>庭上<sub>一</sub>皆隔<sub>二</sub>花<sub>一</sub>、各々其程相隔分立、皆以<sub>二</sub>天童<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>先<sub>一</sub>秋花猶<sub>レ</sub>殘<sub>二</sub>玉惜<sub>一</sub>飄颻、<sub>二</sub>装束<sub>一</sub>、金銅錦繡之類、光輝照耀、

想<sup>(像カ)</sup>緣極樂世界、彌<sup>(添カ)</sup>淨土欣樂之心、三方<sup>ハ</sup>供物之儀不<sup>レ</sup>違<sup>ニ</sup>注<sup>ニ</sup>載<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>度々<sup>ニ</sup>林葉雖<sup>レ</sup>未<sup>ニ</sup>染<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>、梢色漸有<sup>レ</sup>紅、池猶如<sup>レ</sup>鏡、

庭砂似<sup>レ</sup>玉、皆以添<sup>ニ</sup>其景趣<sup>ニ</sup>之故也、南方<sup>ハ</sup>供物了引歸之間、念佛衆出<sup>レ</sup>聲<sup>ニ</sup>、定心<sup>ニ</sup>敬心<sup>ニ</sup>、其聲如<sup>ニ</sup>迎陵頻<sup>ニ</sup>念佛衆等即各々

抑<sup>レ</sup>涙、愈聽聞之輩簾中簾外堂上堂下莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>抑<sup>ニ</sup>隨喜之涙<sup>ニ</sup>、何況於<sup>ニ</sup>願主之心<sup>ニ</sup>哉、凡今度四十八時<sup>ニ</sup>、自<sup>ニ</sup>去<sup>ニ</sup>廿五日<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>滿<sup>ニ</sup>四十八時<sup>ニ</sup>也

之間、心中殊澄、時々刻々莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>垂<sup>ニ</sup>涙<sup>ニ</sup>、淨土欣求之志彌以増進、誠是拋<sup>ニ</sup>萬事<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>營<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>詮也、本意已滿足畢<sup>(中略)</sup>四方<sup>ハ</sup>悉供物了、引返經<sup>ニ</sup>本路<sup>ニ</sup>歸入<sup>(中略)</sup>導師念佛衆等着<sup>ニ</sup>堂中座<sup>ニ</sup>、<sup>兼敷<sup>ニ</sup>半<sup>ニ</sup>帖等<sup>ニ</sup></sup>次導師着<sup>ニ</sup>禮盤<sup>ニ</sup>、啓<sup>ニ</sup>白事由<sup>ニ</sup>、說

法之間各又拭<sup>レ</sup>涙<sup>(中略)</sup>導師纏頭退座、念佛衆等起<sup>ニ</sup>座<sup>(中略)</sup>念佛衆等向<sup>ニ</sup>娑婆屋<sup>ニ</sup>、定心<sup>ニ</sup>讀<sup>ニ</sup>臨終<sup>ニ</sup>講式<sup>ニ</sup>、次有<sup>ニ</sup>迎講事<sup>ニ</sup>、

其儀如<sup>レ</sup>例、仍委不<sup>レ</sup>注<sup>ニ</sup>之、事了分散、但新成<sup>ハ</sup>予有<sup>ニ</sup>願念之旨<sup>ニ</sup>、作<sup>ニ</sup>摸子形<sup>ニ</sup>、<sup>僧形、其色黃<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>黑柴衣<sup>ニ</sup></sup>乘<sup>ニ</sup>金蓮華<sup>ニ</sup>、後方小僧等三

四輩取付、件蓮華中彫刻也、此善結緣衆姓名悉書之入籠也、又自<sup>ニ</sup>去<sup>ニ</sup>廿五日<sup>ニ</sup>、在<sup>ニ</sup>々所<sup>ニ</sup>々於<sup>ニ</sup>四十八所道場<sup>ニ</sup>、限<sup>ニ</sup>四十

八時<sup>ニ</sup>修<sup>ニ</sup>念佛<sup>ニ</sup>、<sup>式乾門院、安嘉門院准后以下令<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>給也、是正信上人多勸<sup>ニ</sup>之、其外諸山諸寺觸<sup>ニ</sup>緣<sup>ニ</sup>勤<sup>ニ</sup>之、多餘<sup>ニ</sup>于四十八所<sup>ニ</sup>、然而不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>止也、獨<sup>(觸カ)</sup>緣多文有懇望之故也</sup>不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>親疎<sup>ニ</sup>觸緣<sup>ニ</sup>勸進也、

公卿按察使伊平卿以下、彼念佛衆等又同注姓名入也、即此新成形鉢乘<sup>ニ</sup>其上<sup>ニ</sup>、此輩及<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ニ</sup>、皆令<sup>ニ</sup>乘<sup>ニ</sup>此蓮臺<sup>ニ</sup>之願

文也、仍彼小僧形等者顯<sup>ニ</sup>引接之意趣<sup>ニ</sup>也、此願已廣大、三寶何無<sup>ニ</sup>哀愍納受<sup>ニ</sup>哉、依<sup>ニ</sup>是歟人々多有<sup>ニ</sup>靈夢<sup>ニ</sup>、佛陀境界

致<sup>ニ</sup>信心<sup>ニ</sup>之時必有<sup>ニ</sup>感應<sup>ニ</sup>也、以<sup>ニ</sup>之知<sup>ニ</sup>之、往生極樂之望、致<sup>ニ</sup>甚深之信<sup>ニ</sup>者決定可<sup>ニ</sup>成就<sup>ニ</sup>大也、去年勤修四十八時念佛、

其後修<sup>ニ</sup>百日念佛<sup>ニ</sup>、今當<sup>ニ</sup>其結願<sup>ニ</sup>、果<sup>ニ</sup>遂<sup>ニ</sup>此大願<sup>ニ</sup>了、我願既滿、衆望亦足者歟、事了聽聞衆分散之後向<sup>ニ</sup>堂<sup>(中略)</sup>今夜、

留<sup>ニ</sup>置<sup>ニ</sup>念佛衆等<sup>ニ</sup>、明旦猶有<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>行小事等<sup>ニ</sup>之故也、其間修<sup>ニ</sup>別時念佛<sup>ニ</sup>、今夜三時也<sup>(傍點同前)</sup>

と記している。菩薩行道の儀式や僧形像の建造など興味ある事項が含まれているので煩をいとわず引用したが、性阿

彌陀佛、觀阿彌陀佛などの念佛衆の役割は傍點の如きものであつた。彼等は講式や禮讃の讀誦、阿彌陀佛號の高稱にお

いてまことに堪能であり、經高から「當世能聲輩也」<sup>②</sup>と云われている。仁治三年十月二十二日から修された萬々遍念

佛、寛元三年十月二十二日に始修された三日三夜念佛、寛元二年三月以降營まれた順次講などにおいても、いずれも觀

阿彌陀佛などの念佛衆が用いられている。彼等は、「餘衆依<sub>レ</sub>法性寺念佛指合<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>來<sub>②</sub>」とあつたり「各衆云、自<sub>ニ</sub>去廿四日<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>土御門三位中將亭<sub>ニ</sub>、修<sub>ニ</sub>念佛<sub>③</sub>」とあることから推察される如く、市中の數多い念佛者同志と互いに能聲を競いあつたり、招かれれば他處へもでかけていつたのである。

かゝる能聲の念佛者は「時衆」として例時念佛に用いられた<sub>④</sub>。彼等の信仰内容は右の經高の日記から窮われる如く觀想念佛、いわゆる天台念佛に近いものであつた。しかしこのような高聲稱名を本分とする彼等が法然の教團と結びつく可能性は十分存在した。「以<sub>ニ</sub>癡鈍身<sub>ニ</sub>、殊好<sub>ニ</sub>唱導<sub>ニ</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>正法<sub>ニ</sub>、說<sub>ニ</sub>種々邪法<sub>ニ</sub>、教<sub>ニ</sub>化無知道俗<sub>⑤</sub>」と云われた中には、この種の阿彌陀聖の系統をひく「阿彌陀佛」僧が存在したと推察される。建久三年秋、後白川院の御菩提のためにやさかの引導寺で大和前司親盛入道見佛が七日念佛を勤行したとき、禮讃の先達をしたのは心阿彌陀佛であり、助音は沙彌見佛安樂、住蓮であつた<sub>⑥</sub>。法然に歸依の後専ら稱名を唱え「世ニハ無知ノ人トオモ<sub>⑦</sub>」われたかの空阿彌陀佛は、「つねには四十八人の能聲をととのへて一日七日の念佛を勤行<sub>⑧</sub>」し、また

「念佛ノ時ノ終リコトニ、此界一人無佛名、西方便有一蓮生、俱使一生常不退、此花還到此間迎、娑婆ニ念佛ヲツトムレハ、淨土ニ蓮スヲ生スナル、一生常ニ退セネハ、コノハナカヘリテ迎ナリ、一生ノ勸修ハ須臾ノホト、衆事ヲナケステネカフヘシ、願ハ必ス生レナム、ユメノオコタルコトナカレ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨<sub>⑨</sub>」

と和讃を誦することを創始し、

「又風鈴ヲ愛玩シテ、テツカラミツカラツ、ミモテ、念佛ノ道場コトニハ必スコレヲカクト云々、其ノココロイカム、コレニ二義アリ、一ニハ風吟ハ人力ヲカラス、只風氣ニマカセテ自然ニ音ヲ出ス、其ノコエ哀亮ニシテ、人ノ心ヲ盪漉シテ、和易專一ナラシムルユヘニ、二ニハ極樂淨土ノ七寶ノ寶樹ノ風ノヒ、キラコヒ、八功德他ノナミノ

オトヲモハムニモ、イササカノナカタチタルヘキカ故ニ、兩事カネソナヘタレハ、一心ニ愛玩<sup>⑬</sup>したというから、空阿彌陀佛にも所謂「阿彌陀佛」僧と共通の性格が見出される。法然を繞る念佛者に、空阿彌陀佛

の外、教阿彌陀佛<sup>⑭</sup>、西阿彌陀佛<sup>⑮</sup>、覺阿彌陀佛<sup>⑯</sup>、幸阿彌陀佛<sup>⑰</sup>、念阿彌陀佛<sup>⑱</sup>、法阿彌陀佛<sup>⑲</sup>、然阿彌陀佛<sup>⑳</sup>（良忠）等がある。然阿彌陀佛の門弟に向阿、唱阿、禮阿等があり、また然阿とともに東國で活躍した者に念阿彌陀佛、道阿彌陀佛<sup>㉑</sup>等があつた。勿論これらの「阿彌陀佛」僧が全て先程のような專職的能聲念佛者であるのではないが、そういった職能を持つ「阿彌陀佛」僧に取り圍まれていたことは確かである。またたとえ右の教阿彌陀佛以下の人物の中で史的人物でないものがあつたり、その法然教團との關係が史的事實でない場合があるにしても、それはこういった「阿彌陀佛」僧が法然教團の周圍に存在したという事實そのものの傳記化とみるべきものであろう。事實われわれは「七箇條起請文」の署名中から前述の如くかなりの阿彌陀佛號者を見出しうるし、喜祿三年八月逮捕が要求された念佛者の中から連阿彌陀佛、さらに延應二年山徒から念佛張本人として指彈された念佛者の中から正阿彌陀佛、名阿彌陀佛などを擧げることができる。

平經高の念佛衆であつた前述の見佛、成願、觀阿彌陀佛は、それぞれ「七箇條起請文」に署名している見佛、成願、觀阿彌陀佛であり、同じく念佛衆の敬佛は、山門の「念佛者餘覺可擲出交名」中の敬佛である、と私は思う。同じ念佛衆中の定心、性阿彌陀佛も延應二年に指摘された張本人中の定眞、正阿彌陀佛ではないかとも考えられるが、これについては確かなことは言えない、しかし彼等が、稱名、和讃、漢讃、唱導等に巧みであり、經高をして黒衣の僧形像を造らしめたり、淨土三部經を摺寫せしめたり、觀經所說の世界を憶念せしめたりしているところを見ると、彼等がいかなる黨類のものであつたかは自明である。日蓮の「念佛者追放宣狀事」によると、專修念佛者は黒衣と禮讃によつて現されているのである。<sup>②④</sup>成願、觀阿彌陀佛等も「能聲之輩」であつたから、曾て「起請文」にも署名して





ともあれ、一律には云えないが、阿彌陀佛號冠稱者の多くは、阿彌陀の聖の系譜に屬するが故に、専修念佛の門に接近し、これと合流もするが、元來阿彌陀聖は藤原時代の觀想的念佛の環境で生長してきたものであるがために、再び古代的佛教へ傾斜し、さらに一遍がでるに及んで、本來的に持っていた阿彌陀聖としての面を呼び起され、かくて時宗へと流れ込むのである。云うまでもなく信州にて端を發した一遍の踊躍念佛は空也の踊躍念佛を再興したものであるから、空也の流れをひく民間の阿彌陀聖がこれに参加するのは當然と云われるべく、吉川氏が云われるところの遊行時衆や道時衆には、これら前代からの系統をひく遊行の阿彌陀聖や集落に定着した阿彌陀の聖がみられたことであろう。

註① 『榮華物語』「御裳著」

② 『今昔物語集』卷二九ノ九。

③ 同右書、卷一七ノ二。

④ 同右書、卷一七ノ八。

⑤ 『榮華物語』「みねの月」

⑥ 吉川氏著前掲書、二四一頁参照。

⑦ 『行基年譜』（續々群書類從第三史傳部）。

⑧ 吉川氏著前掲書、二四六頁参照。

⑨ 『空也誅』

⑩ 『方丈記』

⑪ 長野縣野澤町金臺寺所藏文書（吉川氏前掲書二三六頁参照）

⑫ 『平戸記』仁治三年三月五日條。

⑬ 同右、寛元三年一月廿四日條。

⑭ 同右、仁治三年八月廿四日條。

⑮ 同右、仁治三年五月五日條。

- ①⑥ 同右、仁治三年五月六日條。
- ①⑦ 同右、延應二年一月十日條その他。
- ①⑧ 同右、延應二年二月廿四日條その他。
- ①⑨ 同右、延應二年一月九日條その他。
- ②⑩ 同右、寛元二年七月十五日條その他。
- ②⑪ 拙稿「我が國初期淨土教の形成史的研究(二)」(東山高校研究紀要第五集)参照。
- ②⑫ 同右、寛元三年十月廿二日條。
- ②⑬ 同右、仁治三年十一月一日條。
- ②⑭ 同右、仁治三年十一月廿六日條。
- ②⑮ 同右、寛元二年七月廿一日條、同三年十月十五日條、この時衆は例時念佛衆の意である。
- ②⑯ 『七箇條起請文』
- ②⑰ 『法然上人傳繪詞』
- ②⑱ 『明義進行集』
- ②⑲ 『法然上人行狀繪圖』四八。
- ③⑰ 『明義進行集』
- ③⑱ 『明義進行集』
- ③⑲ 『法然上人行狀繪圖』廿。
- ③⑳ 同右、卅三。
- ③㉑ 同右、四二。
- ③㉒ 同右、四二。
- ③㉓ 同右、四二。
- ③㉔ 同右、四八。
- ③㉕ 同右、四三。
- ③㉖ 同右、四六。

③⑨ 辻善之助博士著『日本佛教史』中世編一。

④⑩ 『平戸記』寛元二年正月廿六日、同年六月廿八日、寛元三年三月四日同年三月廿四日條など。

④⑪ 同右、仁治三年九月廿九日。

④⑫ 同右、仁治三年五月五日條。

④⑬ 同右、寛元三年十月十五日、また同年二月廿五日條など。

④⑭ 田村圓澄氏「專修念佛の受容と彈壓」(佛教文化研究五)。

④⑮ 『平戸記』仁治三年九月廿九日、寛元三年十月廿二日條。

④⑯ 『勅傳』四八。

④⑰ 『平戸記』仁治三年十一月一日條。

④⑱ 『勅傳』四八。

④⑲ 『平戸記』寛元三年三月廿八日條。

⑤① 『明月記』建保五年三月廿九日、嘉祿元年五月四日條。

#### 四

以上主として阿彌陀佛號を持つ職業的僧尼、即ち謂うところの「阿彌陀佛」僧について、その發生及び性格等を少しく考察してきた。しかし既述の通り阿彌陀佛號を冠稱しているものは、ひとり職業的僧尼に限られるのではなく、俗人乃至在俗の所謂入道者に於ても亦みられるところであるから、こゝではこの種の阿彌陀佛號所有者について眺めてみたい。

この方面の研究としては水上一久氏のものがある。<sup>①</sup>これは、土地關係の文書を通してみられる在地領主層への阿彌陀佛號の普及に注目し、その普及の経路は淨土教の在地波及の経路であるとして、阿彌陀佛號をとらえて、淨土教の傳播を社會經濟史方面より考察せられたもので、淨土教研究史上きわめて意義深いものである。以下こうした先達的研究

究に教えられつゝ私なりの觀點で考察したところをのべてみよう。

云うまでもなく、貴賤上下にわたつて阿彌陀佛號を付與することを始めたのは重源である。その時期は『南無阿彌陀佛作善集』に基いて壽永二年前後であり、東大寺大勸進を契機としてゝあつたことは、今日異論はないようである。水上氏の研究によると、建久、正治、建仁の間を境として、それ以前は彼の同行衆を中心として普及し、それ以後全國の規模を以て擴大したというが、これは種々の史料に徴して認められるところである。かくて十三、十四世紀と時代が降るにつれて、阿彌陀佛號が、武士、農民、商工、藝人等の間に流行したことは周知の通りである。阿彌陀佛號が僧尼世界のみならず一般社會人の間にかくも普及したことにについては、それ相應の理由があつてのことにちがいないが、阿彌陀佛という聖號を俗人が我が名にすることにについて、なんらの抵抗もなかつたのであろうか。單に聖職者が聖號を付與するからこれを受けるといつたものであつたろうか。在俗者における阿彌陀佛號を考える時先ずこのことが問われねばならぬと思う。このことが明らかにされることによつて、爆發的とさえ云つてよい程の阿彌陀佛號の社會化が理解されるであらう。

この理由を探ぐる爲には、重源が聖號の付與を始めた原初の當時に還つて考えてみるのが至當である。勢觀房は重源の阿彌陀佛號付稱に關して『法然上人傳記』で

「大佛上人發二意樂云、我國道俗跪三閻魔宮之時、被問ニ交名ニ者、其時爲レ令唱ニ佛號ニ付ニ阿彌陀佛名ニ」と述べている。こゝにいうかくの如き重源の意樂が事實であつたかどうか斷定は困難であるが、假りに重源自身の考へでないにしても、被授与者には如上の考へでこれを受けとつているものがあるという意味で、意義がある。慈圓は「大方東大寺ノ俊乘房ハ、阿彌陀ノ化身トイフコト出デキテ、ワが身ノ名ヲバ南無阿彌陀佛ト名ノリテ、萬ノ人ノ上ニ一字ヲオキテ、空阿彌陀佛、法阿彌陀佛トイフ名ヲ付ケルヲ、誠ニヤガテ我名ニシタル尼法師オホカリ」<sup>③</sup>

と記している。依之觀此、當時阿彌陀佛號は地獄觀を抜きにしては受け止めることの出来ないものであつたことが十二分に窺われる。元來淨土教信仰は、特に庶民層のそれにおいては、既に十世紀以降地藏信仰を媒介として、且つ阿彌陀信仰と地藏信仰とは混融のまゝで形成されてきたのである。<sup>④</sup>地藏信仰は舊佛教からの淨土教への參加を意味するが、淨土教側本來の阿彌陀信仰と地藏信仰とか混融して存在したということは、兩者が地獄觀を共通の場としていたことを示唆している。阿彌陀信仰も地獄觀を踏まえて成立してきたのである。弘長二年以後弘安元年以前につくられたと思われる、金澤文庫所傳の『念佛往生傳』は攝津國井戸庄小野左衛門（法名成佛）の傳記を載せ、次のような往生譚を記している。

「天性惡人、殺生爲業、不知後世、就中於祖父墓所之邊放鷹、射鹿之間雄追入堂內、即於佛前殺之了、此時寺僧不堪悲慙、可稱念佛之由教之、親光不念佛、剩習僧成嗔怒、仍寺僧等同心念佛、此時親光少懺悔之心出來、心中十念了、其後生年四十六歲六月十三日受重病、同十四日絕入、即如夢趣冥界、先如例放鷹之間落馬入深坑、彼坑遠事如京與鎌倉往還、即在大河岸、見之大鬼其數不知何千萬、其中女鬼其長百丈來近云、早可來云々、其鬼之氣息如炎火燒身、又大鬼等以刀切親光之身分爲一萬六千々々々、鬼各領一分各分、墮已地獄、此地獄又各有八萬四千釜、煎熟無極、又此外種々苦患不可說、又有寒氷地獄苦相種々也、如此經十五年了、又應墮無間地獄云々、此時思出祖父墓所、堂寺僧所勸之念佛、其時墓所堂僧一人出來勸念佛、隨教念佛、十人之僧又出來、仍彌念佛、僧放金色光照、親光蒙光攝之間、我身忽成金色了、此時十方諸佛菩薩并諸天善神炎魔王等來現而禮親光、又阿彌陀三尊來迎諸同業衆生而親光一人（尾闕）」（傍點筆者）

右の記事で、地獄に墮ちた極惡人が化身たる念佛僧の勸めで、念佛することによつて、自からも聖體に化していく、即ち救済されていくという、傍點を施した部分の描寫が注目される。こゝに書かれているような考え方は、前掲の

『法然上人傳記』が述べるところの念佛の機能や『愚管抄』が伝える「阿彌陀ノ化身トイフコト」なる想念と、相通するものであると認められよう。口稱念佛は阿彌陀佛を喚招することにおいて六道輪廻を斷ち切り罪重き衆生を救済するに至る機能を持つていたのだという精神素地があり、かゝる宗教的心意の底流が、口稱念佛に直結する阿彌陀佛號名を、納得せしめていたと考えられるのである。かゝる内面的素地がある上に、我が國の人々は早くより佛、菩薩、賢聖號を人名や地名に用いることに馴染んできているので、聖職者ならざる俗人が、聖號を己が呼名とすることを異様とはしなかつた、という外面的な素地もあつた。このように内外兩面の素地に擁せられて世人は、重源の阿彌陀佛號の付稱をなんらの抵抗を感ずることなく容認し、むしろこれを歡迎したと、解せられるのである。

さて、ともかくこのような心意構造を持つて、阿彌陀佛號は世間に普及したわけである。

西大寺觀尊像の納入文書中の「近住男女交名」には死亡者を含めて僧俗男女都合三百二十五人の結縁者の名が連ねてあるが、この中約三分の一の百四人は阿彌陀佛號冠稱者である。<sup>⑧</sup>一々その名を挙げないが、とも角西大寺、法花寺の附近にはこのようにかなりの密度で數多くの阿彌陀佛號所有者が居住していたわけであつて、このようなことは、多少の差はあつても各地でもみられたであらうと考えられる。

ではこのように阿彌陀佛號を冠稱するひとびとはどのような階層に多かつたであらうか。この點に關して極めて示唆的であるのが、西大寺田園目錄である。この田園目錄は、文永十一年（一二七四）と正應元年（一二八八）の兩度に注記され、さらに永仁六年（一二九八）追記されたものであつて、觀尊によつて中興された西大寺の經濟的基盤を明らかにしている貴重なものであるが、この中に阿彌陀佛號者がかなりその名を見せている。ある程度一定の時期と地域における阿彌陀佛號者の存在をきわめてよく示しているので、以下煩を避けず阿彌陀佛號者のみを摘記してみる。

右京一條三坊一坪二段（朱書）「畠一段宛長谷寺見阿彌陀佛忌日田了  
嘉禎二年丙申爲同人之沙汰寄入之」  
田一段爲僧常住借物尼信如忌日田沽却了」

（朱書）「已被落了」  
十市郡廿三條五里廿九坪一段 自北三段目

寛元三年乙巳冬尼金阿彌陀佛源信比丘母儀 寄入之

添下郡右京二條四坊三坪一段 字字佐野

建長六年七月八日寄入於四王堂釋迦燈油田畢尼生阿彌陀佛

添下郡右京二條三坊一坪四段 此內西二段寄進結緣堂之

正嘉元年丁巳三月廿五日爲長谷寺尼見阿彌陀佛忌日田爲知事沙汰買之

城下郡西郷十三條一里八坪四段

文應元年六月日彼子息男女依母如阿彌陀佛遺言三段目四段目二段傳睿尊同七月廿八日爲如阿彌陀佛忌日三月廿日  
并同廿一日御影供寄進之畢（以下略）

（朱書）「直物沙汰シテ本所へ返了」  
十市郡東廿二條一里廿三坪一段 自北四段目  
字釜生田

弘長三年七月日尼藥阿彌陀佛爲阿闍梨實遍寄進之



添上郡東六條四里卅六坪內下一段字浦里春日田

同所二段字大石

正嘉三年三月十五日尼十阿彌陀佛寄進之

添下郡秋篠鄉內大川中尾東谷三段字別當谷

文永十一年甲戌四月日依生阿彌陀佛俗名清高遺言彼子息等寄之

高市郡北郷廿六條四里廿九坪內一段

文永八年辛未十二月四日尼西阿彌陀佛九月光明眞言修中僧食斷寄入之

添下郡今里庄內一段自東四段目  
字上丹波池

弘安三年庚辰十二月七日尼心阿彌陀佛每年六月六日僧食新寄入之

山邊郡八條七里廿二坪內一段戌亥角也字ナラタ  
内山ノ口ニアリ

弘安四年辛巳十一月廿六日尼心阿彌陀佛 爲子息孝尊堯忍房光明眞言修中僧食斷寄入之

十市郡東廿一條二里卅一坪內二段自北四五段目中副  
中村郷大安寺地也

所當米一石二斗十一合升定 段別苗六 歲末二  
五合ツ、

弘安九年丙戌閏十二月三日尼禪阿ミタ佛毎年十月一日忌日新田寄之

廣瀨郡十八條一里十八坪内二段自西二三段目字コモウ

廣瀨郡廿條二里十三坪内一段四段切字鳴田

廣瀨郡廿二條二里一坪内一段 自東四段目  
字タワラ又ハクホ

廣瀨郡廿條三里十二坪内一段自東畔本ミヤケチ

已上五段四段切正應五年九月十五日佐味五郎左衛門入道實阿ミタ佛光明眞言祈寄之

このほか阿號のものとしては、妙阿(弘安三年十二月十五日、添下郡右京一條北邊三坊二坪内一反、同年同月同郡左京九條一坊十六坪内一反)、善阿(文永十年二月廿九日、城内一、西阿(正應六年八月一日、吉野)、善阿(弘安七年八月廿日、添上郡)、戒阿(正應四年八月廿三日、山)、善阿(善提院戒和尚一、西阿(郡池田里内三所四段小)、善阿(左京東五條五里六坪内二段)、戒阿(正應四年八月廿三日、山)、善阿(善提院戒和尚十月平群郡十市郡内三所計四段)等を付加することができる。

これらを見るに、阿彌陀佛號所有は、最後の佐味五郎佐衛門入道實阿ミタ佛の如きを除いては、零細農民層に屬する形同沙彌、沙彌尼が多いようである。また以上の例だけでは少し不十分ではあるが、阿號のものは、何々阿彌陀佛と佛號を冠稱する者より、寄進の土地の大きいものが多いので、そこになんらかの差序が存するようにも思われる。

右の例にみられる如く阿彌陀佛號者が零細農民であつたことは、また僧房造營等の寄付金の高によつても窺える。弘安三年の「西大寺西房造營同心合力奉加帳」によると、例えば僧侶や在家衆が五貫文、十貫文等であるのに對し、近住の彼等は三十文、五十文、百文等、多くて一貫文程度の高であつた。

畿内莊園の特色はそれが均等名であり矮小田堵名主層より成つていたと云われているが、畿内に多くみられる阿彌陀佛號者は、このような均等化された小規模の土地保者であつたり、また均等名形成にとり残された零細田堵層であつた。もつとも阿彌陀佛號名を持つものは畿内だけではなく、先きにもその例があつた如く大規模な土地所有者もあつて、零細農民のみが阿彌陀佛號を冠していたとは云えないのであるが、畿内におけるかゝる土地的制約がこの地における阿彌陀佛號所有者をして零細農民として表出しているのである。丁度阿彌陀佛號が輩出するのは、畿内においては人身的支配にも甘んぜざるを得ない零細田堵名主層が一般的形成にまで達し、社寺貴族が古代的支配を再編成するため、これらの零細田堵名主層をその物質的基礎の中心として把握するに至つた、その時期であつた。右の「西大寺田園目錄」もこういつた事情を考慮してふりかえるならば、そこにみられる零細田地の寄進やその零細田地の所有者―ひいては阿彌陀佛號者―の（畿内における）歴史的意味が一步明らかとなるであらう。

さて、西大寺の場合を主として眺めてきたが、いま見た如くであるから、さきの西大寺觀尊像納入文書中の「近住男女交名」にみられる阿彌陀佛號者も、零細田堵名主層に屬するものであつたろうと推測されるのである。

この西大寺の例はその他の寺院についてもこのようであつたろうことを物語つている。西大寺の場合の如く畿内寺院の周邊農民層には阿彌陀佛號を稱するものが多かつたであらう。では何故寺院の周邊に多いかと云えば、これは水上氏も言われた如く、<sup>⑨</sup>畿内寺院と周邊の小地主階級とは土地を媒介とした經濟的關係を持つており、また僧徒行人の供給源としての譜代關係を有していたから、寺院内部の、即ち專職的な念佛僧にみられた阿彌陀佛號の使用が寺院と密接な關係にあるこれら農民の上にも波及していつたものと思われる。事實先程の「近住男女交名中」には

#### 八齊戒衆

法阿彌陀佛百文

明阿彌陀佛百文

明觀房百文

善戒房百文

在家

眞阿彌陀佛百文

永忍房百文

阿古女百文

已上

本鏡房二貫文 敬順房四百文 光心房五百文

(中略)

日善房五百文 戒齋 入戒房百文 齋戒 修觀房三百文 在家 檀帟十帖 正勝房 帟十帖 在家 本覺房 在家 觀阿ミタ佛百文 淨任

已上

などとあつて、寺院との間に右の如き關係が結ばれていたことを知り得るのである。

しかし乍ら、こういう外面的關係のみからでは阿彌陀佛號普及の理由づけは不十分であると思う。なぜなら、これだけでは、阿彌陀佛號者が寺院の周邊に特に密である理由は説明できても、何故在俗の彼等が阿彌陀佛號にひかれ、專職の僧侶と同じように斯號を冠稱するに至つたのかということに對しては十分な説明とならないからである。阿彌陀佛號の流行は、阿彌陀佛號名を選択し、これを特に使用するという彼等の心意なくしてはあり得ないのであるから、こゝにおいて私は本項の冒頭でのべたような彼等の宗教的心情(淨土教的)を重視したいのである。かゝる彼此の理由相俟つてこそ、阿彌陀佛號を冠稱する人々の簇出した因由が満足せしめられるのである。

註① 水上一久氏「阿彌彌佛號についての一考察」(上下)(國學院雜誌五七—4、五八一—二)。

② 『法然上人傳記』(醍醐本)。

③ 『愚管抄』卷六。

④ 歌川學氏「空也と平安佛教」(『日本歴史』六一)、里内徹之氏「日本淨土教成立前史における念佛集團について」(『龍谷史壇』三六)、拙稿「我が國初期淨土教の形成史的研究」(『東山高校研究紀要』四)参照。

⑤ 家永三郎氏著『中世佛教思想史研究』二二四頁。

⑥ 金澤文庫藏『念佛往生傳』第四五話。

- ⑦ 賢聖號を里名につけたことは神護景雲二年五月丙午勅（續紀卷二九）に出ている。またその頃民間で「用<sub>二</sub>佛菩薩及賢聖號<sub>一</sub>いたものが多かつたという（續紀卷二九神護景雲二年五月三日條）。このような傾向がその後もあとをたたなかつたことは諸種の文獻に徴される。いまわれわれが考察の對象としている時期の例を挙げると次のようなものがある。藥師丸、觀世、普賢女、釋迦阿、地藏女、藥師女、彌陀王、觀音、釋迦、勢至、釋迦王、毗沙女、彌陀、阿彌陀佛、淨土、無量壽、千手、南無阿彌陀佛、彌陀法師（西大寺有恩過去帳、弘安三年）
- ⑧ 『西大寺叡尊傳記集成』收錄（三七九—三八三頁）百四名のうち男八名、女四十例名は死亡者であり、残りの五十一名が現存者である。内男は二名、女は四十九名と女性の阿彌陀佛號所有者が壓倒的に多い、この傾向は本文で例を挙げた「西大寺田園目錄」中の阿彌陀佛號所有者にも現れている。

- ⑨ 「西大寺田園目錄」（『大日本佛教全書』（寺誌叢書）、『西大寺叡尊傳記集成』等所收）。

- ⑩ 「西大寺西房造營同心合力奉加帳」（『西大寺叡尊傳記集成』所收）一部を掲げると次の如くである。

當寺近住男分十一貫二百文之内

三貫文	善春房	如佛房	一貫文
二貫文	順長房	二貫文	淨勝房
五百文	法妙房	三百文	善明房
一貫文	願佛房	二百文	如戒房
五百文	行忍房	五百文	妙眼房
二百文	敬念房		
近住女分十七貫六百二十文之内			
十貫文	妙法房	二貫文	唯心房
一貫文	戒阿彌陀佛	一貫文	念阿彌陀佛
二百文	西信房	二百文	得阿彌陀佛
五百文	西阿彌陀佛	百文	得阿彌陀佛
百文	蓮住	二貫文	如阿彌陀佛

百文 性如房沙汰 百文 蓮妙房

百文 順阿彌陀佛 二貫文 如阿彌陀佛

二貫文 欣妙房 百文 蓮妙房

已上十五人

壹貫文 當寺長順房 壹貫文 觀生房正實

追奉加之

この外、任意に摘記すると次のようなものがある。

戒阿彌陀佛<sup>五十文、過去</sup>、福阿彌陀佛三十文 禪阿彌陀佛五十文 西阿彌陀佛二百五十文

⑪ 渡邊澄夫氏著『畿内庄園の基礎構造』参照。

⑫ 水上氏前掲論文（上）八九頁。

⑬ 『西大寺叡尊傳記集成』三八八頁。